

育児支援におけるペアレントメンターの役割と効果

— 2名のスタッフへのインタビューからの一考察 —

宮津寿美香, 片岡菜々子

長崎大学教育学部 中学校教育コース家庭専攻 保育学研究室

Roles and effects of parent mentor in childcare support — A study of interview at 2 staff —

Sumika MIYATSU, Nanako KATAOKA

1. 背景

1-1. 子育て世代における育児支援の現状と課題

平成27年の長崎市子育て支援課の調査によると、少子化、核家族化、地域のつながりの希薄化等により、子育て世代が身近な人から子どもや子育てに関する助言や支援を受けることが難しい状況になっていると指摘している。考えられる原因の一つとして、核家族化が進んだことにより、親族や地域からの援助が得にくい状況にある家庭が増えていることがあげられる。このような中、子育てをする家庭の孤立感や子育てに係る負担感の軽減を図り、安心して子育てができる環境をつくるためには、育児支援の充実が欠かせない。

現在、さまざまな育児支援が広がってきているが、その中でも、障害のある子どもへの支援は少ない。その理由として、未就学児では、はっきりとした診断が出ない場合が多いことがあげられる。しかし、実際に子育てをしている親の中には、未就学児の段階ですでになんらかの「育てにくさ」や「かかわりの困難さ」に悩みを抱えている人は多く、中嶋・斎藤ら(1999)によると、障害のある子どもの家族は、障害のない子どもの家族に比べて、さまざまな心理的な負担や困難を抱えていることを指摘している。また、全国児童相談所における家庭支援への取り組み状況調査報告書(2009)によると、障害のある子どもが親から虐待を受けるリスクが高いことを指摘しており、身体障害のある子どもの場合、虐待を受けるリスクは健常児の4.3倍であることを明らかにした。さらに、同報告書では、知的障害のある子どもは、13.3倍というデータもある。不安や悩み、負担が大きくなりすぎてしまい、悲しい事件につながらないようにするためにも、障害の有無に関係なく、すべての親への支援が望まれるが、障害のある子どもをもつ親への支援や相談の場がみえにくいのが現状である。また、障害の可能性のある未就学児への支援については、無いわけではないが、その多くは病院等の専門機関で行われていることがほとんどであり、「誰でも気軽に足を運ぶことができる」施設は少ない。障害への早期発見や、支援の在り方に注目が集まっている今、障害のある未就学児への支援やその家族に対する育児支援はさらにニーズが高まってくると考えられる。

1-2. ペアレントメンターとは

現在、日本各地で行われている未就学児への育児支援は、その多くが重篤な障害のない子どもたちを対象とし、なんらかの障害のある子どもへの支援は、専門機関で行われていること、また、そのスタッフは医師や看護師等のいわゆる専門家が対応していることが多い。そのような中、近年、育児支援における新たな取り組みとして「ペアレントメンター」による支援活動が注目され始めている。

特定非営利活動法人・日本ペアレントメンター研究会のホームページによると、ペアレントメンターとは、「自らも障害のある子ども（特に発達障害）への子育てを経験し、かつ相談支援に関する一定のトレーニングを受けた親を指すもの」としている。ペアレントメンターが育児支援の場に加わることで、同じような発達障害のある子どもをもつ親に対して、共感的なサポートを行い、地域資源についての情報を提供することが期待されている。

ペアレントメンターによる支援は、専門家による支援とは違った効果があることが指摘され、厚生労働省においても有効な家族支援システムとして推奨されている。現在ペアレントメンターの活動は、全国の自治体に広がるとともに発達障害を中心としながらも、それ以外の障害にも広がりを見せている。

長崎県では、平成26年から親の会に所属している人の中から推薦を受けた人を対象に、ペアレントメンター養成研修を実施し、「少し先を行く先輩」として、保護者の心理的支援などの家族支援に取り組んでいる。主な活動は、個別相談、ペアレントメンター派遣事業、啓発活動（キャラバン隊活動等）などである。ペアレントメンター派遣事業は、保護者懇談会、研修会などへの依頼を受け、活躍の場が少しずつ広がり始めている。また、平成29年度からは県からの委託事業として行われはじめた。

1-3. 本研究の目的

これまで述べたように、ペアレントメンターによる支援は推奨されているものの、導入されての年数が浅いためか、実際に利用している方の声や効果については、まだ報告が確認されていない。したがって、本研究では、ペアレントメンターがスタッフとしてかかわっている未就学児を対象とした長崎市内の育児支援施設でペアレントメンターとして活躍されているスタッフへのインタビューから、ペアレントメンターが支援にかかわることの効果および意義について考察を試みた。本研究では、2名のペアレントメンターのインタビュー内容を提示する。

2. 方法

2-1. 対象者

発達につまずきがある未就学児を対象とした、育児支援施設でペアレントメンターとして、従事するスタッフ2名。2名のスタッフの詳細は以下である。

スタッフA：30代女性、5人の子どもの母親であり、長男が自閉症と軽度の知的障害、次男が重度の精神発達遅滞である。

スタッフB：40代女性、3人の子どもの母親であり、2番目の子どもが脳動静脈奇形による脳内出血で、四肢麻痺である。

インタビューを行う上で、2名のスタッフには、研究内容についての説明を行い同意書にもサインをいただいた。尚、1人当たりのインタビュー時間は、30～60分である。

2-2. インタビュー方法

仕事をしているうえで、「困難さ」、「やりがい」、「子育ての課題」、「ペアレントメンターの意義」等についてインタビューをした。インタビューの方法は、半構造化インタビューで行い、録音機は使用せずメモを取る方法で行った。

3. 結果と考察

Table 1 は、スタッフAとスタッフBのインタビュー内容について、まとめたものである。

「仕事をしているのやりがい」の、スタッフAの項目①については、初めて施設Aに来所した際は、施設に入ることすらできなかった子どもが、2回目、3回目と来所する回数を重ねていくうちに、一人遊びができるようになり、周りの子どもたちと遊ぶことができるようになる様子がうかがえたという。項目②③については、1度来所し、スタッフの方々と話し、施設が心のよりどころとなり、また何度も足を運んでくれる保護者の方が多く、中には初めは父親の理解があまりなかった家庭も、時間をかけて話を聞く中で、母親だけでなく父親も一緒に来所してくれるようになった事例もあったようだ。スタッフBの項目④については、保護者の悩みを聞いているときに、「私もそういうことあった!」とペアレントメンター自身が振り返り、自らの体験を踏まえながら対応することで、保護者が「悩んでいるのは自分だけじゃないだ」と実感する瞬間が伝わるのが嬉しいと語っていた。

保護者の抱えている不安を、ペアレントメンターに話すことで軽くすることができたり、子どもたちの成長を感じたりすることが、ペアレントメンターとして働く喜びに繋がるようである。

一方で、「仕事をしているの困難さ」について、スタッフAの項目⑤「厳しい環境」の背景に、「虐待」があることがうかがえた。ペアレントメンターとして、同じ母親であるという立場から、悩みを聞くことやアドバイスをすることはできるが、「どこまで問題に踏み込んで良いのか」その線引きが非常に難しいという。そのため、項目⑥⑦にあるように、保健師や社会福祉士など、さまざまな専門機関との連携を図ることで、家庭への支援を強化できないかと考えていた。項目⑨については、障害がある子どもとの関わりは自身の経験を生かして保護者にもアドバイスをすることができるが、保護者にも何らかの障害があり、うまく子どもと関わるできない場合の支援については困難であることがうかがわれた。他にも、項目⑩にあるように、子どもの障害を受け入れることができずにいる保護者の方もいる。施設Aに来所したということは、子どもの発達で気になっていることがあるのは確かだが、障害として受け入れることができず、専門機関で診療や治療をできないでいる保護者が多いことも現状である。スタッフとしても、無理に専門機関に行くようにすすめることはできず、保護者を傷つけないようにと考えながらも、「どうすることが子どもと保護者の方のためになるのか」を日々、自問自答しながら支援をしていることがうかがわれた。

Table 1. The contents of interview

	スタッフ A	スタッフ B
仕事をして いてのやり がい	① 施設に入れなかった子どもが遊ぶことができるようになる ② 保護者の方がまた行こうと思って足を運んでくれる。 母親だけでなく父親も一緒に、家族で来てくれるようになる ③ 信頼関係ができていて感じる	④ 共感することができたとき
仕事をして いての困難 さ	⑤ 厳しい環境の中で子育てをしている家族へのサポートが難しい ⑥ 多職種の連携が必要だと感じる ⑦ 専門の方たちとのサポート体制をつくるべき ⑧ 悪いことをして気を引こうとする子どもへのアプローチの仕方が難しく、保護者との信頼関係ができていないときに叱っていいのかの葛藤がある ⑨ 保護者の方も障害がある場合の対応 ⑩ 障害のことを受け入れられない保護者の方への対応 ⑪ 環境を整えたら成長できる子どもだが、保護者がつくっている環境が成長の邪魔になってしまっている場合の支援の仕方	⑫ 自分の子どもとは違うところで困っている 保護者の方へのサポートができない ⑬ 障害の幅が広く、ちゃんと寄り添うことができていないか不安にあることがある ⑭ 1 度来所されたっきり来ない保護者には、もっと他に良いアプローチがあったのではないかと感じる
現代の子育 ての課題	⑮ 孤立した子育てになってしまっている ⑯ 周りに話したら、仲間がいることをわかかってほしい ⑰ 家にいる人たちにどうやって支援を知ってもらうか、どうやって来てもらうか	⑱ 頼るところがない保護者の方が多く子育ての悩みを 1 人で抱え、頑張りすぎていると思う ⑲ より所やわがままを言える場所がもっと必要だと思う
ペアレント メンターの 意義	⑳ 共感する思いがあるということが、医療機関などの専門機関とは大きく異なること ㉑ 支援サービス利用や手当てや療育機関などのことについて詳しいため、とても役に立つことができる	㉒ 共感するということに大きな意味がある ㉓ 子育ての中で困ったことや同じだったり、タイミングが同じだったりするため、専門の方に聞くよりも、相談がしやすい

項目⑪について、例えば、偏食のある子どもに対して、「料理があまり得意ではないから」と諦めてしまっている保護者の方がいるという話だ。環境を大人が整えてあげたら、成長の見込みがある子どもたちはたくさんいるのに、その環境を与えず、保護者側が諦めてしまうことは、スタッフ側から見てもとても悔しいと言う。そのような保護者の方に檄を入れるのもスタッフの役割で、「共感しながらも一緒に前に進んでいこうという気持ち」を持ってもらいたいと語っていた。

また、ペアレントメンターに期待されることとして、「共感」することがあげられるが、同じ障害であったとしても、個性や程度は様々であり、すべての悩みに対して的確に対応することは困難であることが、両方のスタッフの話から推測できた。スタッフBは、初めてかかわる障害種の子どもたちも施設Aには多く来所するため、項目⑬のように、障害の知識に関して足りないと感じ、不安になることがあると言う。項目⑭については、1度来所されて以来、来られていない保護者の方に対して、「もっと良い情報を流せたら良かった」と感じたり、「時間をかけて話を聞くことができたら良かった」と思うことがあるということだった。

「現代の子育ての課題」については、スタッフA、スタッフBの項目⑮⑯⑱⑲に共通して、「孤立した子育て」についてだった。核家族化が進み、地域や親族からの支援を受けられない家庭が増え、特に母親一人で悩みを抱えて子育てをしている方が多いと言う。勇気を出して、周りに話してみたら仲間がいるということに気付いてほしいと語っていた。また、忙しくて気持ちに余裕がないと、子育ての環境も整えることができないため、項目⑰にあるように、この施設Aをきっかけに、さまざまな支援があることや、同じ悩みを抱えている人がたくさんいるということを知ってほしいと強く話していた。実際にどうやって施設のことを知ってもらうかも課題の1つで、現在InstagramやLINEなどのSNSを利用し発信を試みている。

「ペアレントメンターの意義」について、スタッフA、スタッフBの項目⑳㉑は共通して、「保護者の方と共感する」ということに大きな意味があるということだった。

医師や保健師、保育士からの専門なアドバイスと共に、同じ障害のある子どもの子育てを経験している立場だからこそ、保護者の方の思いを想像することができる。経験した人にしかわからないつらさや苦しさを共感することは、現時点で子育てに悩んでいる保護者への大きな支えに繋がるのであろう。また、項目㉒にあるように、サービスの利用、手当や療育機関を詳しく知っていることも、障害のある子どもを育てた経験がいきているようだ。したがって、項目㉓にもあるように、専門機関と、同じ立場の人・子育てに悩んでいる仲間、両方とうまくつながることができるように促すことができるのも、ペアレントメンターの役割であると考えられる。

本研究ではスタッフへのインタビュー調査から、ペアレントメンターの意義について考察を試みた。ペアレントメンターが育児支援の場に加わることで、プラスになることは多くあるものの、課題をとまなう点もあるということがわかり、スタッフは日々省察を繰り返しながら利用者とかかわっている様子がうかがわれた。また、施設では子どもと母親がリラックスして過ごすことができるよう、さまざまな配慮をしていることがわかった。保護者とペアレントメンターが、共に子育てについて話していくうちに、自ずと信頼関係が築かれ、少しずつ施設が保護者の方の心のよりどころとなっている。この信頼関係を築くこ

とができるのも、「共感」という気持ちがあるからだと言える。

課題については、大きく2つ述べたい。1つ目は、ペアレントメンターが各家庭の問題にどこまで介入するか、の線引きが難しいという点である。来所する方の中には、虐待など厳しい環境の中で子育てをしている家庭もある。ペアレントメンターが相談にのったり話を聞いたりするだけでは解決できないことも多々ある。そのような場合には、保健師や社会福祉士など、様々な専門機関との連携を図り、多様な視点や角度からの支援を強化する必要であると考えられる。実際、スタッフの中でも専門的知識を身につけるために、社会福祉士などの資格の取得を目指している方もいた。心のよりどころになることはできるが、「難しい問題を抱える家庭」への支援は、ペアレントメンターの力だけでは十分であるとは言いがたく、「ペアレントメンターが出来る支援の在り方」については、様々なケースに対応しながら、今後検討していく必要があると考える。

謝辞

お忙しい中、インタビューにご協力いただきましたスタッフAさん、スタッフBさんに心より感謝申し上げます。

文献

長崎市子育て支援課「長崎市 子ども・子育て支援事情計画」(2015)

中嶋和夫・斎藤友介・岡田節子 母親による育児負担感に関する尺度化, 厚生統計協会, 46(3), 11-18 (1999)

特定非営利活動法人 日本ペアレントメンター研究会 <https://parentmentor.jp/>

(参照: 2020年10月24日)

全国児童相談所長会「全国児童相談所における家族支援への取り組み状況調査」(2009)